向け再び感染者が出た場合、「ガイドライン」に則り、「学校の設置者」の主体的な判断ができるのだろうか？学校を安易に自粛の象徴に祭り上げないでほしい。学校は子どもたちを守る砦なのだから。

（のむら　のりこ・新潟市）

新型コロナ・ウイルスと黒死病　―透けて見えた日本の社会の後進性―

大滝浩道

『デカメロン』に描かれた黒死病

コロナ・ウイルスが日本と世界で猖獗をきわめていたこの春に、カミュの『ペスト』（文庫版）の出版元である新潮社では今年の2月からだけでも、15万4千部ほどの増刷を繰り返しているとか。この小説は1894年ごろにペストが流行したアルジェリアの状況を主に描いたものであるが、最近の新型コロナ・ウイルスの流行に重ね合わせて、読まれているらしい。

そのほかにも、デフォーの『ペスト』やボッカチオの『デカメロン』など一連のペスト禍を描いた文学を〝ペスト文学〟と称するらしい。

それで私もボッカチオの『デカメロン』を再読した。これはご存知のように一四世紀のヨーロッパで猛威をふるったペスト（黒死病）の流行のあり様を記録したものである。しかも地中海沿岸諸都市を席捲していたペストが、１３４８年頃に「ひときわ秀でた花の都フィオレンツァに、死の疫病ペストが襲い掛かってきた」（ボッカッチオ『デカメロン』講談社文芸文庫）状況をこの時点で同地に住んでいたボッカチオが記録したもので、資料的価値が高い。

流行の渦中にいた人物が描いたものとしては貴重である。まわりから「不謹慎」と批判され、本人が焚書を覚悟したという話もあるくらい、迫真の記録である。幸い彼は焚書も感染もしなかったらしい。

「昼となく夜となく死んでゆく者たちが町にあふれ」「人々は死骸を家から引きずり出し、それぞれの戸口の前に置いた」「いまや人間が死んでも、山羊が死んだほどには心を痛める者はいなくなった」「ペストの猛威のために、また救いの手を必要としたにもかかわらず近寄ることを恐れた健康な人間たちに見捨てられた者たちの数は、フィオレンツァの城壁のなかだけでも十万人以上であったと信じられている」「あるものは花を、あるものは匂いのいい草、またある者はさまざまな香料を握って、それらをしばしば鼻先に押しつけ、その香気で脳を休めるのが最良の策であると考えた」

（『デカメロン』講談社文芸文庫）

ひとたび黒死病が流行すると、死を覚悟して町に居残るか、感染の及ばない地域に逃げだす以外に手段はない。『失楽園』の著者、ミルトンが原稿を抱えて逃げ回ったことはよく知られている。

死を思え（memento mori）！

この一四世紀のペストの流行について高校の参考書は次のように述べている。

「数年間でヨーロッパの人口の3分の1が死ぬほどの恐ろしい悲劇で」、「世界史のなか

で、ペストが大流行した時期は何回かありましたが、この時期ほど衝撃的なものはありませんでした。（中略）地域によっては村人が全滅するような恐ろしい病が広まった衝撃は、言葉で説明できない」。

（「ナビゲーター世界史B」山川出版）

ペストは鼠などが媒介する腺ペストと、クシャミなどでうつる肺ペストがある。特に肺ペストに感染すると鼠径部などの柔らかな皮膚の部分に小さな腫物ができる。つづいて高熱が出て、うわ言をいい、最期には体が黒ずんで死に至る。そのために黒死病（black death）と言われ、当時はこれに感染すると100％近い死亡率と言われたらしい。そのために、西欧世界では日常的に、「死を思え！」（mement mori?）という言葉が流行った。このころの西洋の肖像画に何の脈絡もなく、髑髏が描き込まれていることがよくあるのはそれである。

いまあげた1348年頃の流行と近世の1665年頃、1910年頃の3回の流行が有名である。近世ではどういうわけか、約300年前後の間隔で流行している。

『ロビンソン・クルーソー』の作者はもう一つ1665年（この年を英国史ではペストの年と称するとか）前後のロンドンを襲ったペストの惨憺たる被害の状況を描いたデフォーの『ペスト』を見てみよう。

ダニエル・デフォーとは言わずと知れた『ロビンソン・クルーソー』を書いた人物である。

私が読んだものは09年発行の中公文庫版であるが、450頁あまりの大著である。小見出しが一本もなく、文中に一、二行の余白すらない。しかし読んでみると実に興味深い。被害の状況がリアルであるためか、最初は実名では発表されなかったとか。被害の実相は1348年頃のフィレンツェと変わりはないが、ここでは市当局がとった貧民救済について紹介しよう。

「当局者が必要に応じて、慎重にかつ快く

にいがた
北から南から

救済の道を講じてやったことは、当局者の名誉のためにもここで一言しておかなければならない」「あらゆる階級の篤志家が救恤金として寄付した金額は莫大な額に達した」という。「どん底生活者には現金をやるとか、ある者には職を世話してやるとか、じかにかゆいところへ手が届くような親切なやり方」とドキュメンタリー・タッチで詳述している。最後に彼の一言を紹介しよう。

「神の加護によるものか、私は依然として病気にかからず……」

それにしても日本は

病原菌が死に絶えるまでなすすべのない、1665年のロンドンのペスト流行から、現在は350年余りが過ぎている。この間の医学の発達にも拘わらず、克服の出来ない病は依然として猛威を振るっている。

しかし今回の日本政府の対応には首をかしげることが多い。困っている人への対応が遅いばかりか、内容が貧困である。そのうえで自助努力に期待しているような行政の対応に呆れる。

さらに病に四苦八苦しているさなかに、学校の9月入学だとか、憲法に緊急事項を書き加えようとか、恥ずかしくもなく、邪な発言を繰り返している。まさに火事場泥棒的発想である。市民レベルでも新型コロナ・ウイルスに感染した家族宅に心無い電話をする人がいるとか。

宇宙まで行くことが出来ても、一七世紀のロンドンの人たちほどの発想の優しさを、持ちあわせていないらしい。

（おおたき　こうどう・所員）